

ペスタロッチーの教育観原型——『シユタンツだより』を通して——

鈴木芳明

はじめに

本稿では、教育原理の古典的な名著であるペスタロッチーの『シユタンツだより』を通して、ペスタロッチーの目指した教育観の基になった実践的体験（原型）を検証し、彼の教育理論や教育的実践の今日的な意義について論証することを目的とするものである。

一 『シユタンツだより』の意義

一七九九年六月、スイスの教育学者であるヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) (以下「ペスタロッチー」) は、心身共に疲弊した体を療養するために、グルニエールに来ていた。

前年十二月七日に、自分の理想とする教育実践をするために、ペ

スタロッチーは、意気揚々とシユタンツへ乗り込み、開設されたばかりの孤児院にたった一人の教師として着任したのだが、最大で八十名にも及ぶ戦争孤児たちとの寝食を共にした彼の教育実践は、その後わずか半年で孤児院が閉鎖に追い込まれたために、ペスタロッチーは後ろ髪を引かれる思いでシユタンツを離れざるを得なかったからである。

『シユタンツだより』は、六週間グルニエールに滞在していた間に、友人宛に書かれたペスタロッチーの書簡、すなわち『シユタンツ滞在について一友人にあてたペスタロッチーの手紙』(Brief an einen Freund über seinen Aufenthalt in Stans, 1799) のことである。

長田新訳『隠者の夕暮れ・シユタンツだより』(岩波書店一九九三年刊)所収「シユタンツだよりについて」の解説によると、ペスタロッチーの重要な協力者ニーデラーの証言として、ペスタロッチーはシユタンツからグルニエールへ移ってすぐに『シユタンツだより』を起草していたことが述べられている。そして、その原稿を

一八〇七年イヴェルドン学園で刊行されていた『人間陶冶のための週報』に、ニーデラーによって注釈が付され、未完成ながらも「ベスタロッターとシユタンツにおける彼の孤児院」と題されて初めて印刷し公表されたのだという。また、前原寿・石橋哲成訳『ゲルトルート教育法・シユタンツ便り』（玉川大学出版一九八七年刊）所収石橋哲成「シユタンツ便り 訳者解説」によると、『シユタンツだより』は、その後一八二二年にベスタロッター生存中に出版されたコック版全集第九巻の冒頭に、ニーデラーの注釈なしの形で、「みずからのシユタンツ滞在について一友人にあてたベスタロッターの手紙」と題して収録されたようである。その後、一九三二年に刊行された校訂版著作全集第十三巻に、「シユタンツ滞在について一友人にあてたベスタロッターの手紙」として収録されたのは、前述したテキストを底本にしたものであるという。こうして、現代の我々は、『シユタンツだより』を読むことが可能になったのである。

また、前述した長田の解説には、「ベスタロッターはこの論文を「一友人宛の手紙」として起草した。」とあるが、注によると、この「一友人」とは、「多分チューリヒ書籍商ハイリヒ・ゲスナー（1769-1813）だろう。」と推測している。それは、ゲスナーがベスタロッターの名著である『ゲルトルートはいかにしてその子を救うるか』の手紙の名宛人であったからというのがその根拠であるようだ。

ところが、ドイツの教育学者ヴォルフガング・クラフスキー著『改訂版ベスタロッターのシユタンツだより』（森川直訳、東信堂二〇〇四年刊）では、手紙の名宛人は、ベスタロッターにシユタンツの

孤児院の経営を依頼したヘルヴェティア共和国文部大臣シユタツパーの秘書官を務めていたJ・R・フィッシャーだったのではないかと推測している。

いずれにしても、『シユタンツだより』の原本はなく、誰に宛てて書かれた書簡であったかについては、はっきりわかっていない。長田にせよ、ヴォルフガング・クラフスキーにせよ推測の域を出ていないのである。

しかも、ヴォルフガング・クラフスキーによれば、この手紙は実際には発送されていなかったというのである。しかし、そういう未完成な手紙の下書きのようなベスタロッターの文章でありながら、この『シユタンツだより』は、日本及び西洋のベスタロッター研究者にとって、今日でもなお極めて重要な高い評価を受けているのはなぜなのだろうか。

それは、『シユタンツだより』の中で述べられている事柄が、戦争で親を失った大勢の子ども達に対して行われた、五ヶ月間にわたるベスタロッターの献身的な教育実践の記録としての価値があるばかりではなく、ベスタロッターが生涯をかけて目指そうとしていた教育の理想像や教育観のエッセンスが、至るところに散りばめられていて、その真髓を垣間見ることができる貴重な資料でもあったからである。

ベスタロッターがシユタンツの孤児院で実践した生活や道徳性を重視した教育実践は、その後ブルグドルグでの教育実践で開花する。彼の直観教授や基礎陶冶の理念、労作教育の思想は、当時のヨー

ロッパでは高い評価を受け、見学に来たドイツのフリーベルやヘルバルトに強い影響を与えたのである。さらには、その後日本を始め世界各国の近代教育に大きな影響を与えたのは周知の事実である。

現代において、ペスタロッチーの教育観は、現代的な視点に立つて再評価されなければならないが、それでもなお彼の教育実践には、現代の我々が見習わなければならない多くの点が存在する。

特に、ノイホーフにおいて貧しい子ども達が自立できるように職業訓練を施したことや、シュタンツにおいて戦争被害を受けて親兄弟を亡くした子ども達に救いの手を差し伸べたこと、一八〇六年には当時まだ珍しかった女子学校を併設し、一八一三年にはスイスで初めての聾啞学校を設立したこと等の実践は、ペスタロッチーの恵まれない子ども達に対する彼の教育的信念に基づく行為からであった。つまり、その後の近代の国民皆学へと発展していく教育制度の理想像は、まさにペスタロッチーやコメニウスなどの教育実践から始まっていると言つてよいのである。

令和の時代になった日本では、貧困問題が教育の重要な課題の一つになっている。親から虐待を受けて学校に通えない児童の増加や引きこもり、不登校など深刻な教育課題が山積している。貧しい民衆に目を向け、温かな家庭から疎外された子ども達に救いの手を差し伸べようとして、身を以て子ども達と向き合ったペスタロッチーの教育実践を学び研究することは、現代の教育にも十分に通ずる意義がある筈である。

そして、その、ペスタロッチーの教育観の原型とでも言うべきも

のを、この『シュタンツだより』から多く紐解くことができるのではないかと考えている。

二 シュタンツの悲劇

シュタンツになぜ孤児院が必要になったのだろうか。

フランス革命後ナポレオンは、中欧の反対同盟に備えるためにスイスに軍隊を派遣し、スイスに対して、フランス革命の模範に従った政治形態を組織するように要求していた。

一七九八年四月、フランスの援助の下スイスの革命家たちによって、中央集権的なヘルヴェティア共和国が成立するが、このヘルヴェティア共和国の革新政府は、各州に新憲法の承認と新政府への誓約を求めていた。しかし、従来の政治形態に不満の無かったスイスの幾つかの州は、自分たちの自主的な自治を求めて、新政府のやり方に対して強く異議を唱えていたのである。

特にウンターヴァルデン州では、旧教徒の神父を中心として市民の抵抗が強く、中央の革新政府に対して誓約を拒否するなど反対派勢力の拠点となっていた。これに怒ったフランス軍が、一七九八年九月、首都のシュタンツに侵攻し、市民に対して激しい攻撃を仕掛けたのである。フランス軍が、虐殺や建物への放火を繰り返したために、シュタンツの街は惨憺たる状況と化してしまったのである。

当時内務大臣を務めていたレンガールの報告によると、死者の数は、男子どもを問わず四百十一名が犠牲となり、家屋焼失七百二十二戸。

親を失い路頭に迷った孤児の数は、実に二百三十七名にものぼったという。

この戦いによって、多数の孤児や貧しい子ども達がシュタッツの街に溢れて社会問題となっていた。そこで革新政府は、一七九八年十一月、シュタッツに孤児院を設けることを閣議決定したのである。文部大臣シュタツパーは、かつて小学校を建てて、貧しい民衆のために教育を施したいと申請していたベスタロッターに対して、小学校の代わりに孤児院の経営と孤児達の教育に当たることを要請したのである。時にベスタロッター五十三歳の年であった。

当初シュタツパーは、師範学校の設置を第一に考えていたのだが、ベスタロッターは、ノイホーフでの経験を生かして、『リンハルトとゲルトルート』で描いたような産業と教育を結びつける学校の設立を提案し、その熱意がシュタツパーを動かしたのである。

こうして、将来スイスのモデル校となる学校を目指すことを条件に、年額三千フランの予算をつけることが閣議で了承された。そこで、ベスタロッターは早速小学校の建設予定地を探すために、チューリッヒやアルガウを飛び回っていたのだが、シュタッツの悲劇はそんな矢先に起こったのである。

一七九八年十二月五日、革新政府は、街に溢れる多数の孤児達を救済するために、シュタッツに孤児院を開設することを決め、前述したようにベスタロッターに孤児院の管理経営と子ども達の教育を委嘱した。孤児院の建物としては、シュタッツの尼僧院附属の建物（カプチン修道院の一角）が選ばれ、当面の補助金として六千フラ

ンの支出が決定されたのである。

この革新政府からの要請に対して、ベスタロッターは、当然のごとく大喜びで承諾した。『シュタッツだより』には、当時のベスタロッターの喜びようが次のように表現されている。『シュタッツだより』のテキストは、ヴォルフガング・クラフスキー著森川直訳『改訂版ベスタロッターのシュタッツだより』を使用した。（以下本論文中のテキストはすべて同じ）

私は喜んでそこへ赴きました。私はその地方に欠けているものを人々の無邪気さで補い、その貧困のなかで感謝の基礎となるものを見出せるであろう、と期待しました。私の生涯の大きな夢の実現にいよいよ着手できるのだという感激で、私は一度仕事をはじめたら、最高峰のアルプスの山中で、たとえ火や水がなからうとも仕事にとりかかるほどでした。

若い頃のノイホーフでの貧民学校の教育実践もそうだが、ベスタロッターの、戦争孤児達を対象にした学校に対するこうした熱き思いを読んだだけでも、彼の貧しい子ども達や親を失い困っている子ども達に対する愛情の深さ、そして彼の奉仕精神の強さを知ることができる。

しかも、ベスタロッターの偉大なところは、そこに行動力が伴っているところである。現代のような平等意識がまだ定着していなかった、階級による差別が厳然として存在する時代において、誰も

顧みることの無かった最下層で苦しむ弱い立場の子ども達に目を向け、ペスタロッチーは、教育することの重要性を、前述した革新新政に請願書を提出して訴えていたのである。

一七九八年五月二十一日付で出されたペスタロッチーの請願書は、孤児院の教育を引き受けることになった同年十二月の約半年前に、当時のマイエル法相宛に出されたものである。この請願書を出したことによって、ペスタロッチーは、小学校を建てて自分の教育方法を実証するために、文部大臣シュタッバーと話し合いの機会を持つことが許され、三千フランの予算まで承認されるようになったのである。

個人的には、彼のこうした最下層の民衆に対する熱き思いを支えた精神的な土壌は、教育的使命感はもちろんあるのだろうが、むしろ宗教的使命感に基づいているのではないかと考えている。つまりペスタロッチーの教育愛は、宗教的な道德観に基づいているところに大きな特徴がある。

そして、その宗教的な道德観や倫理観は、小さいときより育まれたものであって、おそらくはペスタロッチーの母方の祖父でヘンク村の牧師であったアンドレアスからの影響が大きかったのではないかと思われる。

ペスタロッチーは、五歳の時に父親が亡くなり、母親のスザンナは、夫の死後三人の子ども達を抱えて、内職をしながら苦しい家計を支えていた。次男であったペスタロッチーは、母スザンナと家政婦バーバラの愛情によって、貧しいながらも温かな家庭で育てられ

ていたのである。

祖父アンドレアスは、貧しい人々が多く住む、ヘンク村の教区の牧師として奉仕活動をしていたのだが、布教活動に出かける際には、いつもペスタロッチーを連れて行ったという。そこでペスタロッチーは、華やかな都会の生活とはまったく異なる、貧困生活にあえぐ農民たちの生の姿を目の当たりにしたことで、大人になったら、祖父アンドレアスのように、貧しい人々の力になりたいという思いが芽生えていったようである。

ノイホーフで、貧しい子ども達に自立できるように教育を授けて救済しようとしたことや、シュタンツで戦争の犠牲になった子ども達のために、孤児院での教育を引き受けたことなどは、祖父アンドレアスから学んだ宗教的奉仕精神から出たものではないかと想像される。つまり、ペスタロッチーのシュタンツ孤児院での教育活動は、ノイホーフでの教育実践に失敗した彼が、その後長年にわたり温めていた教育実践への思いを、再び叶えることができる絶好の機会でもあったのである。

一七九九年一月十四日、まだ学校の施設や設備が十分に整わない中で、シュタンツ孤児院でのペスタロッチーの教育活動は遂に開始された。

長田の「シュタンツだよりについて」の解説によると、「一七九九年一月十四日には最初の児童が収容され、二週間にして四十五人、二月十一日には六十二人、春の終わりには実に八十人を数えた。孤児院の授業は毎日午前六時から八時までと、午後四時から八時まで

と行われ、中間の時間は手工業と労働に当てられた。」とある。

シュタンツ孤児院の教師は、ペスタロッチー一人だけであった。一人の家政婦を雇った以外は、誰の手伝いも受けなかったのである。

一人が一番多いときには八十名もの児童を指導していくことの大変さは、教育に携わった者であれば誰でもすぐにわかることである。また、教育日課にはさらに驚かされる。朝六時という早い時間に子ども達を起こして、夜の八時まで一人で指導していくことは、なかなかハードな教育実践だったのではないだろうか。

ペスタロッチーの教育は、子ども達と二十四時間、寝食を共にしながらの教育実践であったことも大きな特徴である。つまり、子ども達に全人教育を施していくことが、ペスタロッチー教育の大きな特徴でもあり目的でもあったのである。

現在でも全寮制の教育を施している学校は、世界中に見られる。しかし、そこでの教師の実際の役割は、せいぜい日中の指導か、それに部活指導や生徒指導等が加わるぐらいではないかと思われる。それでも働き方改革が叫ばれるくらいにもすごく大変である。毎日子ども達との合宿生活を、教師一人でこなすようなペスタロッチーの教育実践が、いかに大変なものであったかは容易に想像がつく。

しかも、当時のペスタロッチーには、病弱な妻アンナと一人息子ヤークコブがいたのだが、二人をノイホーフに残したままでの単身赴任であった。そして、ヤークコブは、シュタンツ孤児院がスタートした二年後の一八〇一年に亡くなっている。

現代的な感覚から言えば、家庭を犠牲にしての教育実践でもあったのである。

三 シュタンツだよりの構成

「友よ！」で始まる『シュタンツだより』は、仮にこれが一回で出された手紙であるとしたならば、その書かれた分量は異様に長い量であったということになる。しかし内容的には一連続きのものには確かになっている。そして、手紙という割には、具体的な相手（友）の名前も一切出て来ないし、書かれた日付も明記されていない。

こうした事柄を勘案すると、個人的には、これは手紙ではなく、書簡形式の論文なのではないかと思っている。長田新やヴォルフガング・クラフスキーが、宛先の友人を推測していたが、要は相手は誰でも良く、途中で孤児院を病院にさせられてしまったことで、ペスタロッチーの教育実践は、五ヶ月という短い期間で断念せざるを得なかったのであるが、ペスタロッチーはそこで実践した自分の教育方法にそれなりの手応えを感じて、「書簡形式の論文」として発表しようとしたのではないかと思われる。

ペスタロッチーは、それまでも資金に困ると論文や小説を発表して、それを元手にして、また教育実践に取りかかっていた。今回も同じように『シュタンツだより』をまとめようとしていたのではないだろうか。

さて、この『シュタンツだより』の構成だが、長田新は、本文に

一から七十八まで漢数字を記載して、小さな段落分けによる構成を考えたようだ。しかし、これでは構成というよりも、書かれた部分を後から指摘しやすいうように、細かく数字を打ったという印象しかない。

石橋哲成は、長田よりも大きく二十四の章段に分けている。具体的には、次のようなタイトルをつけてまとめている。

- 1 シュタantz赴任までの経過
- 2 シュタantz孤児院の状況
- 3 孤児院の子どもたちの状態
- 4 人間本性に対する確信
- 5 内なる力の尊重と生活教育
- 6 家庭内な教育関係の必要
- 7 信頼と愛着の獲得
- 8 教育を推し進めるにあたっての障害
- 9 子どもたちとの生活の実際
- 10 変化を見せた子どもたち
- 11 高次な基礎の探究
- 12 道徳的感情の喚起
- 13 道徳的感情と克己の訓練との結合
- 14 体罰の問題
- 15 道徳的知見の育成
- 16 集団の中での道徳教育

- 17 生活経験にもとづく認識であること
- 18 精神諸力の均衡のとれた発達
- 19 愛があつての方法であり、技術であること
- 20 学習と労働の融合の必要
- 21 読み方・書き方の指導について
- 22 子どもたち同士の相互学習の可能性
- 23 教材と教授方法の単純化について
- 24 シュタantzからの退去

石橋のこのまとめ方は、具体的で大変に優れている。それぞれのタイトルを読んだだけで、書かれている内容がわかるように構成が考えられている。

ヴォルフガング・クラフスキーは、石橋よりもさらに大きく四つに分類した上で、それらをさらに細かく項目立てすることによって、多様な問題領域を相互に関係づけて概観できるように工夫されている。こうした分類の仕方は、なかなか思いつかないやり方だと思われるので、参考までに次に挙げておく。

- 一 出発点の状況
 - 1 シュタantz以前のベスタロッチーの教育計画
 - 2 シュタantz、外面的諸前提と放置された子供たちの状態
- 挿入
- 体系的性格

- (a) 放置された状態における人間的な素質および能力の動揺とそれを取り除く可能性
- (b) シュタンツの一般的な意味づけ公的教育は家庭教育を模倣すべきだ
- (c) 子供と善

二 シュタンツの教育現実と教育経験から生じた道德教育の理論

- 1 道德教育の第一段階…「多面的な配慮」——信頼を目覚めさせること
 - 2 最初の困難と最初の成果
 - 3 道德教育の第二段階への移行…子供たちのあいだに兄弟姉妹關係を形成することと純化された内面から外的秩序をつくり上げること
 - 4 第一のまとめ
 - 5 第三段階への先取り（反省）
 - 6 道德教育の第二段階…道德的行為と自己訓練
 - (a) 「アルトドルフ」の出来事
 - (b) 静寂と自己訓練
 - (c) 処罰についての余韻
挿入
 - (d) 犠牲を覚悟した人間の模範の影響に対する事例
 - (e) 体系的な回顧と予見
- 7 第二のまとめ

8 道德教育の第三段階…反省

- (a) 熟考の対象および出発点としての子供の経験
- (b) 熟考の成果としての「多くを包括する大きな概念」の価値

9 人間的知と呪い

三 シュタンツにおける教授

- 1 教授と道德教育
- 2 学習と手労働との結合
- 3 教授実験と教授原理
 - (a) 援助原理

四 回想と自己批判、誤解と承認

ヴォルフガング・クラフスキーによる『シュタンツだより』の構成のまとめ方は、石橋哲成のものより全体的な繋がりを意識したまとめ方であることがわかる。特に注目されるのは、ペスタロッチーの教育実践において最も重要な道德教育に関するまとめ方である。第一段階から第三段階にかけて、発達段階的にまとめられているところに工夫の跡が認められる。

石橋哲成も道德教育に関して、「道德的感情の喚起」「道德的感情と克己の訓練との結合」「道德的知見の育成」「集団の中の道德教育」というように、かなり具体的に記述されている。これら道德

教育に関する項目はもちろんのこと、二人のまとめた他の項目や分類に気をつけながら今度は、『シユタンツだより』の内容について考えていきたいと思う。

四 『シユタンツだより』の教育実践

1 ペスタロッチーの目指した教育

友よ！私が再び夢から覚めてみますと、私の仕事がまたしても打ち壊され、私のなげなしの力は、いたずらに使い果たされたのです。

しかし、たとえ私の試みがどんなにもろく、またどんなに不運だったとしても、私の試みの地点にしばし立ち止まり、私が確信している根拠についてじっくり考えてみることは、人間愛のころをもった人なら誰にでもきつと役立つことでしょう。私の確信するところによれば、幸せな後世の人たちが、いつの日か私の希望の糸を、私が失わざるを得なかつたところで再びしっかりと結びつけてくれるであろうと思います。

右は、『シユタンツだより』の冒頭の一節である。ペスタロッチーが結婚した後の二十三歳から始めたノイホーフにおける農場経営や貧民学校経営が三十四歳で失敗し、五十三歳で始めたシユタンツ孤児院での教育実践が、道半ばで再び頓挫してしまったことに対して、

「再び夢から覚めて」「私の仕事はまたしても打ち壊され」たことが、痛切な思いと共に回顧的に手紙の冒頭でまず述べられている。

このペスタロッチーが行おうとしていた「私の試み」とは一体どのようなものであったのだろうか。そしてそれは、ペスタロッチーが描いた「夢」でもあり、「幸せな後世の人たちが、いつの日か私の希望の糸」を「再びしっかりと結びつけてくれる」ことを「確信」するに至った「根拠」にもなっている。

この冒頭の文章のすぐ後に、その答えが書かれているのだが、それは「民衆教育」のことである。ペスタロッチーは、ノイホーフにおける教育実践とシユタンツにおける教育実践との二つの教育実践を通して、「この国の最も貧困な子供たち一人一人をできるだけ十分に教育すること」の重要性を実感し、「共和国にとって教育制度の改革が絶対に必要である」ことの「確信」が得られたというのである。

「民衆教育」の具体的な方法に関しては、『シユタンツだより』の中では、「工業や農業を外的な教育手段と結びつけることによって、私の施設を拡張し、その内的な目的を完成するのを容易にする」と記されている。

子ども達が貧困から抜け出すためには、工場や農業における技術を身に付けることによって、賃金を自らの手で稼ぎ、自立した生活を送らせる必要があることをペスタロッチーは考えていたのである。いわゆる労作教育・職業教育が重視されていたのだが、そこには働くことによって人間性や社会性が涵養されることをも目的とされて

いたようだ。

ただし、ヴォルフガング・クラフスキーによると、「民衆教育」(Volkserziehung)の概念の中で、ペスタロッチーが「民衆(Volk)」という言葉を用いる場合は、あくまでも十八世紀の用語として限られた意味範囲のものであると指摘した上で、それは「下層の」「貧しい」民衆のことであり、農夫や小作人や日雇い労働者、工場労働者、自立していない手職人等のことであるとされている。

つまり、ペスタロッチーが目指した教育は、下層階級のための「社会学的に見れば階級教育」であって、自立した手職人や小商人や下級官吏といった「中間階級」までの人々については、ペスタロッチーの「民衆教育」の概念の中に含まれていたかどうかは難しいというのである。

『シュタンツだより』の中でも、前述したヴォルフガング・クラフスキーの考えを裏付けるような次の表現が出て来る。(傍線は筆者注)

だから私は、私のかねてからの民衆教育の希望をできるだけ広めましたし、とりわけ私の考える全範囲にわたってルグラン(当時スイスの執政官の一人であった)に打ち明けました。彼はそれに関心を示しただけでなく、共和国にとって教育制度の改革が絶対に必要なだ、という私の判断に同意しました。そして次の点で私と意見が一致しました。すなわち、この国の最も貧困な子供たち一人一人をできるだけ十分に教育することによって、彼らが自分

の階級から引き離されるのではなく、むしろその階級にしっかりと結びつけられるとき、民衆教育も最大の効果が得られるであろう、ということだ。

ペスタロッチーの民衆教育の概念が、「民衆教育」を施すことによって、貧困からの脱却を目指してはいたものの、それは、「下層階級」を脱して「中間階級」まで上昇するための教育実践ではなく、「彼らが自分の階級から引き離されるのではなく、むしろその階級にしっかりと結びつけ」られることこそが、国家にとって、「最大の効果が得られる」有意義な教育になるという考えであった。

ヴォルフガング・クラフスキーは、ペスタロッチーの教育実践に対して、決して否定的に捉えているわけではないが、「貧民は貧民に耐えうるまで」教育しなければならぬというのが、現代教育学のペスタロッチーの「民衆教育」に対する「疑う余地のない原則」であったことを指摘している。

ヴォルフガング・クラフスキーは、さらに「これは反動的な綱領という意味ではなく、原則的に変わらないもの、神が付与したものとみなされる社会的な階級的層に対してである。」と補足説明を加えている。そして、「真の人間性」は、「上層の階級」よりも、むしろ「貧民」層の方がより直接的に獲得できるとペスタロッチーが考えていたことも紹介している。

ペスタロッチーの貧しい子ども達や恵まれない子ども達に対する献身的な教育実践は、時代を越えて評価されるべき意義を有するも

のであることは間違いないが、それは、あくまでも当時の時代世相や社会通念上の価値観を越えた概念であつたわけではなく、現代のようなすべての人間を対象とした、普遍的な価値観とは異なる限定的な概念であつたということは、注意しておかなければならないようである。

2 人間性を疎外された子ども達

初めのうちは夜のベッドが不足していたので、かわいそうな子供たちの一部を家へ帰さねばなりません。この子供たちはみな、朝になると案の定タニやシラミにかかつて戻ってきました。この子供たちのほとんどは、この施設へ入ってきた当時、人間性がないがしろにされると誰でもそうならざるを得ないようなひどい状態でした。ほとんど歩行もできないほど根のはった疥癬にかかつて入つて来た者も多くいました。頭にできものができてただれている者も多く、タニやシラミのたかつたボロ服を着た者や、骸骨のようにやせ衰え、顔は黄色っぽくなり、歯をむきだしにし、不安に満ちた眼をして不信心と心配しわだらけの顔をしている者も多くいました。厚かましくふるまい、物乞いし、猫をかぶり、どんなだましにも慣れきつた者も少しはいました。また、貧しさに押しつぶされて、我慢強いが、疑い深くて思いやりがなく、また臆病な者もいました。

右の文章は、シュタンツ孤児院で受け入れが始まつた当初の子ど

も達十名の様子が描かれた一節である。ペスタロッチャーはかつてノイホーフで貧しい農村の子ども達を預かつた経験があつたといふものの、戦争の犠牲になり親を失つた子ども達や、たとえ親がいたとしても、物乞いをして歩くしかできないような悲惨な子ども達の様子は、ペスタロッチャーの想像以上であつたのではないだろうか。右に引用した文章には、受け入れが始まつた当初の子ども達の様子が、かなり詳しく克明に描かれていることがわかる。

心身共に衰弱し、何日も不衛生な環境の中で過ごし続け、満足な食事もなくに与えられなければ、深刻な健康被害を被ることは容易に想像がつく。十名の子ども達は、皆栄養失調になり、骸骨のように痩せ細つて、ほとんどの子ども達が皮膚病を患つていた。しかも、彼らを庇護する親兄弟を亡くしたことにより、温かな家庭のぬくもりや精神的な支えを失い、いきなり路頭に放り出されて、厳しい現実に直面させられてしまつたわけであるから、子ども達が不安や孤独感に苛まれ、不安定な精神状態となり、極度の人間不信に陥ることは当たり前のことである。明日の食べ物にも窮していた、こうした戦争孤児の子ども達を救済することは、当時の革新政府にとつては急を要する緊急事態であつたのである。

シュタンツの戦いによつて犠牲になつた子ども達は、ペスタロッチャーが書いていたように、まさに「人間性がないがしろにされ」た状態だつたと思われる。

現代であれば、まず衣食住を確保し、専門の複数の医療スタッフが派遣されて、子ども達の健康の回復がまず図られるのではないかと

と思われる。教育は、その生きていく上での最低限の保障が確保された上で、初めて施されるのではないだろうか。

そして、それと同時に、心が傷ついた子ども達の心理的なケアも専門スタッフによって行われなければならないだろう。現代では、そうした子ども達に対応するための組織もスタッフも物資もそれなりに揃っているが、それでも難しい対応を迫られる筈である。

ペスタロッチーは、この難しい対応にどのように取り組んでいったのであろうか。

3 家庭的な愛情と家庭的な教育

家庭で親から守られていた環境から、いきなり戦いによって親を奪われ、過酷な環境に長時間放置され、人間性をないがしろにされた子ども達に対する教育的なアプローチは、まず傷ついた子ども達への心を癒し、人間性を回復することに全力が注がれるのではないかと思われる。

ペスタロッチーも同じで、「単純ではあるが純粋な家庭的環境ないし家庭的な関係」を孤児院に作ることに取り組んだとある。

傷ついた子ども達の心を癒すためには、家庭的な温かさや家庭的な愛情をもつて子ども達に接することをペスタロッチーは第一に取り組んだのである。

家庭的な教育の大切さが強調された『シュタンツだより』の該当箇所を、次に二つ紹介したいと思う。

私はもともと、公の教育は家庭教育のもつ長所を模倣しなければならぬということ、また前者は後者を模倣することによってはじめて人類に貢献するということを、私の実験によって証明しようと思っていたのです。

あらゆるよき人間教育は、居間における母親のまなざしが、毎日毎時その子供の精神状態のあらゆる変化を確実に自分の眼で、自分のくちびると自分の額で読みとることを求めます。それは本質的に、教育者の力が純粋で、家庭的関係の全範囲にわたってあまねく活気づける父親の力であることを求めます。

これを読むと、ペスタロッチーの教育が目指した、「純粋な家庭的環境ないし家庭的な関係」を学校の中で築き上げていくことは、シュタンツ孤児院という特殊な環境に置かれた子ども達を対象にした教育ばかりではなく、公教育の場でも実践されることを前提としたものであることがわかる。

母親のように一人一人を慈しみ、父親のように家族のために働くことで、家族全員の生活を保障して活気づける。学校教育であつても、家庭のように一人一人に目をかけて、愛情をもって優しく包み込むような教育が施されるのであれば、子ども達の持つ潜在的な諸能力は、自然と発揮され発展していく筈だというのが、ペスタロッチーの考えであつたようだ。

ところが従来の学校教育は、「人間の教育に必要な全精神を包含

することのない学校の授業」によって、「わが人類を人為的に萎縮させる方法へと導く以外にはない」として、痛烈に批判しているのである。

シユタンツ孤児院のように、愛する家族を失い、人間性をないがしろにされた子ども達には、厳しい教育で接するのではなく、むしろ温かで包容力のある家庭のぬくもりのような愛情が求められているのだと思われる。

4 愛情から信頼関係の構築へ

私のところは私の子供たちに愛着しており、彼らの幸せは私の幸せであり、彼らの喜びは私の喜びであるということ、そのことを私の子供たちは朝早くから夜遅くまで、いついかなるときも私の額に見、私の唇に感じとるはずでした。

私は何よりもまず子供たちの信頼と愛着を得ようと望みましたが、またそうせざるを得ませんでした。それに成功しさえすれば、ほかのすべてのことがおのずからうまくいくだろうと確信しました。

人間不信や猜疑心に凝り固まってしまった子ども達の心を、どのようにして回復させたらよいかという一番難しい教育的課題に、ベスタロッチャーは、子ども達との信頼関係を築くことをまず最優先に実行したようである。孤児院に來ている子ども達は、親を亡くし

た子ども達ばかりではなく、親が貧しくて物乞いをして生活しているような子ども達も預かっている。

いずれの場合であっても、孤児院で過ごすということは、親から離れて過ごさなければならぬために、ベスタロッチャーが親代わりとなつて、四六時中彼らと共に生活せざるを得なかつたようである。こうした共同生活による共有経験を重ねていくことで、子ども達とベスタロッチャーとの間の信頼感が、少しずつ芽生えていったのであつた。

いじめや不登校、貧困問題など現代教育が抱える生徒指導上のさまざまな問題にとつても、最も重要なことは、教師と生徒との信頼関係をいかに築き上げていくかという点だが、ベスタロッチャーの教育の基礎もまさにこの点にあつたことは注目に値する。

そしてその信頼関係を築いていくためにも、教師が愛情をもつて児童や生徒に接することの重要性を、改めてこのベスタロッチャーの教育実践から知ることができるのではないだろうか。

5 集団の中の規律の必要性

当初十名で出発した孤児院の生活は、みるみる内に人数が増えていき、あつという間に八十名もの子ども達を抱える大所帯となつていった。最初うまくいっていた家庭的な関係は、人数が増えるに従つて難しくなつていったようである。

私は言い表し難いほど辛かつたのです。授業をうまく組織だて

ることが、まだできなかったからです。

子供たちを全面的に信頼したり熱意をもったからといって、個々の子供たちが示す粗野や施設全体の混乱状態をとり除けるものではありませんでした。私は施設全体を秩序正しく運営していくために、いっそう高次の基礎を求めなければなりませんでした。

孤児院で預かる子ども達の人数が十数名位の少人数であれば、家庭的な雰囲気の中で指導していくことは可能であったかもしれないが、七十、八十という大人数になると、集団教育の新たな指導方針と集団生活を送る上での規律やルールが必要になってくる。「子供たちを全面的に信頼したり熱意をもったから」といってもなかなかうまくいかないのは当然で、現在でも多くの「熱心な」教師が最初にぶつかる壁でもある。

活動を目的とするための手段としての沈黙は、おそらくそのような施設の第一の秘訣となるでしょう。

私がある場において教えようとする際に、沈黙を要求しましたが、それは目的を達成するための大切な手段でした。また、子供たちが座っていないかなければならないとき、姿勢をきちんと正しくしていることも、同様に大切な手段でした。

ベスタロッターは、自分が先に言ったことを子ども達に復唱させているときに、「冗談ばく彼らにじっと親指見つめる」ことを要求

したという。つまり授業中の私語を禁じたのである。「そのようなこととしたことをきちんと守らせることが、教育者にとって大きな目的を達成するための基礎としてどんなに役立つかは、信じられないほどでした。」

『シュタンツだより』に書かれたこれらの事柄は、姿勢を正して授業を受ける、人の話を静かに聞く、私語をしないなどのルールを決めて子ども達に守らせることによって、集団の規律や秩序が改善し、大勢の子ども達を教育する効果が上がったことを示している。

このような経験から私は、道徳生活のためにちよつとした態度になれさせることが、どんな教訓や説教よりも比較できないくらい道徳的・技能的实际的な教育のために役立つことを学びました。

6 道徳教育の重要性

大勢の子ども達への指導に自信を深めたベスタロッターは、いよ子ども達の内面の教育へと踏み込んでいく。

私は外面的なものに対しても活動的で、注意深く、親切で従順にさせるためには、まず子供たちの内面的なものや正義や道徳や情調を彼らの内面において呼びさまし、鼓舞する以外にはありませんでした。私はイエス・キリストの高貴な原則、すなわち「まず内を浄めよ、さすれば外もまた浄まるべし」という原則に立つ

ほかはなかつたのです。この原則はいつも、私の仕事の歩みのなかで異論の余地なく実証されました。

シユタンツ孤児院の子ども達に、どのようにして正義や道徳観を教えていけば良いのかという難問に、ペスタロッチーが求めたものは右のようなキリスト教の道徳観であり倫理観であった。実際には、ソクラテスの問答法のように、教えるというよりも子ども達に考えさせて物事の本質に気づかせるやり方が採られたようである。

次に『シユタンツだより』に書かれたいくつかの事例を紹介したいと思う。

私は彼らに道徳も宗教も教えませんでした。しかし、呼吸が聞こえるほど彼らが静かにしているとき、私はたずねました。「おまえたちが騒いでいるときより、こうしているときの方が、もっと賢く、立派では無かろうか」と。

私はまた、ときどき子供たちにたずねました。「貧しい人々を教育して、彼らが全生涯にわたって自立できるようにする政府と、彼らの貧困を実際にとり除こうともせず、彼らの悪夢と怠惰を真に止めさせることもせず、そのまま放っておいたり、彼らに施しのパンを与えたり、養老院へ入れたりする政府との違いはなんだろうか」と。

ペスタロッチーの教育は、押しつけの教育ではなく、子ども達が幼いなりに自分達の頭で考え行動できるようにする教育であった。時間がかかるけれども、一つ一つ子ども達に物事の善悪を教えていくことが大切なのである。こうした地道な指導者側の努力があつて初めて人間的な成長が見込めることを、古今東西を問わず、多くの教育者は実感していることであろう。

こうしたペスタロッチーの努力が実り、ある日、彼は感動的な場面に遭遇する。

私は子供たちに、よく考え熱心に働くことによつて確実にパンが得られるようになり、無知で教養もなく不幸な人々に助言し手助けできる、静かで平和な家庭生活の幸福についてよく語りました。私は最初の月のうちすでに、感情に富む多くの子供たちを、私のふところを抱えながらたずねました。「私が貧しい不幸な人たちの仲間のなかで生活しているように、おまえたちは喜んで彼らを教育し、教養のある人間にしてあげようとは思わないか」と。ああ、「もしほくもそのようにできたら」と応えたとき、彼らはどんなに感激し、彼らの目にはどんなに涙が浮かんでいたことでしょう。

いつまでも貧乏なままでいるのではなく、いつか身につけた知識と技能によつて彼らの仲間たちのなかに入っていく、彼らのために役立つこともできれば、彼らの尊敬を受けることができるという見込みが、何にもまして子供たちを奮い立たせました。

ペスタロッチーは、子ども達に、知識と技術を学び、働くことの大切さを教えていたばかりでなく、働くことよって初めて家族を養うことができ、幸せで温かな家庭を築くことができることを子ども達に理解させようとしていたのである。

それは、哀れみを施されて他人から恵を受けて生きていくのではなく、人として自立した生き方の教えでもあった。

しかも、同じように貧しい環境で働いている人々に対して、貧しさから抜け出すために貢献できるような人になって欲しいと訴えたのだが、静かにペスタロッチーの話を聞いていた子ども達は、その奉仕活動の崇高さを理解してくれたというのである。

そして、その奉仕活動は、今まさにペスタロッチーが実際に行っているシュタンツでの教育実践そのものであったのである、つまり、この話は、子ども達からペスタロッチーの教育実践を認められた証でもあった。子ども達の涙は、まさにペスタロッチー自身の涙でもあったのである。

参考文献

- 1 ペスタロッチー著 長田新訳『隠者の夕暮れ・シュタンツだより』岩波書店一九九三年刊
- 2 ペスタロッチー著 前原寿・石橋哲成訳『ゲルトルート教育法・シュタンツ便り』玉川大学出版部一九八七年刊
- 3 ヴォルフガング・クラフスキー著 森川直訳『改訂版ペスタロッチーの

シュタンツだより」東信堂二〇〇四年刊

- 4 村井実著『いま、ペスタロッチーを読む』玉川大学出版部一九九〇年刊
- 5 長尾十三二・福田弘著『ペスタロッチ』清水書院一九九一年刊
- 6 虎竹政之著『ペスタロッチー研究』玉川大学出版部一九九〇年刊
- 7 黒澤英典著『ペスタロッチーに還れ』学文社二〇一五年刊